

# 保 育 奉 公

## 大 東 亞 戰 爭 必 勝 完 遂

明治天皇御製

新 竹

みるたびに高くなりぬる若竹はいまぞ生ひたつさかりなるらむ

みるからに、ほんたうにみるからに、すく／＼と伸びてゆく姿に驚かされるのは、若竹の成長である。まだ、身も細くなよやかに、膚の色もうい／＼しい今年竹の、まことにこんな力があるかま、目をみはらされる程に、ぐん／＼と高くなつてゆく。御製は、初夏の籤原に、青々さ若い新竹を御詠遊ばされてゐるま拜するが、その潑刺さに、庭の若竹、幼い子ぎもを聯想せしめられずにはない。身も心も、まだかよわい幼児であるけれども、その發達のすさまじさは、新竹の生長にひこしい勢である。いまぞ生ひたつさかりまこそ、たゞ驚きながめられる。

教育は、素より成長ばかりではない。しかし、その成長の力を信頼することなしに、教育はあり得ない。信頼はたゞに期待ばかりではない。凝視に基く驚嘆の實感である。對象に此の實感をもつこまなくして、教育は行はれ得ない。

御製は、われらに、幼児らを見る目を教へ給ふ。いまぞ生ひたつさかりなるらむ。この時をあたに見過してよからうか。この成長をたゞそのまゝに打ちすてゝ置いてよからうか。

御製は更に教へ給ふ。

吳竹のなほき心をためずしてふしある人におほしたてなむ

畏くも、教育ま題させ給うてある。